



## 「帝国日本の気象観測ネットワーク 満洲・関東州」

山本晴彦 著

農林統計出版, 2014年1月  
330頁, 3,400円(本体価格)  
ISBN 978-4-89732-284-1

データ・レスキューという言葉がある。退蔵されているデータを見つけ出し、亡失しないように保存すること、そして、利用しやすい電子データに変えることである。日本にも数は多くないが、気象データのレスキューに取り組んでいる研究者がいて、国内外のデータの発掘と保全を進めている。著者の山本晴彦氏もその1人であり、本書はその活動の中で生まれたものである。著者は昨年4月に「満洲の農業試験研究史」(農林統計出版)を出しており、本書はそれの気象版と言える。

旧満洲(現・中国東北部)の気象事業には日本が深く関わったが、その実態についての文献は今までほとんどなかった。本書は、著者が収集した資料に基づき、その経緯を詳述したものである。目次は以下のようになっている。

### 序章 課題と方法

- 第1章 満洲における気象観測資料の保存状況
- 第2章 東清鉄道による気象観測と北満における気象記録
- 第3章 関東州における気象観測の変遷
- 第4章 南満洲鉄道株式会社における気象観測の変遷
- 第5章 満洲国中央観象台における気象観測の変遷
- 第6章 関東軍気象部の創設と変遷
- 第7章 中央気象台の気象業務と満洲国中央観象台との連携
- 第8章 満洲に関連する気象資料
- 第9章 満洲気象観測資料のデータベース化と気象環境の評価
- 第10章 終戦後における満洲国中央観象台の職員の状況

### 終章

序章の書き出しは「満洲・関東州の気象観測の歴史を語る上での原点となる出来事は、日露戦争の開戦である」となっている。このように、日本の関与による

旧満洲の気象観測は20世紀の初頭に始まり、1930年代の「満洲国」時代を経て1945年の敗戦まで、半世紀近い歴史を持つ。その間、この地域の政治情勢は目まぐるしく変化し、気象事業にも幾多の変遷があった。各章にはそれぞれの段階の組織・体制や収集されたデータの内容が克明に記述されている。例えば「満洲国」時代には、中央観象台の下で最終的に100以上の観測所が置かれたこと、中央観象台長には和達清夫や大谷東平など後に気象庁の中核を担った人も就いていたことが分かる。

それにしても、よくこれだけの資料を集めたものだと思う。著者の収集活動は10年に及び、その間に中国やアメリカにも足を伸ばしたとのことであり、その労力、熱意には頭が下がる。については、ぜひ多くの方に本書の一読をお勧めしたい…と言いたいところだが、気象事業の歴史やデータに関心の薄い読者にとっては、行政文書や資料の紹介が延々と続いて退屈かも知れない。しかし、本書を全体として見たとき、データ・レスキューがいかに大きな労力を要し、かつ、やりがいのある仕事であるかを実感させられる。本書がデータ・レスキューへの認知度を高め、そのさらなる発展をもたらす契機になることを期待する。

著者の資料収集活動に対し、気象庁の図書室は協力的だったとのことである。これは気象庁に勤める評者にとって嬉しいことであり、応対した職員の方に敬意を表したい。気象庁に限らず、原簿などの形で収蔵されている観測データは日本国内にもまだまだたくさんある。予算や人員などの制約はあろうが、過去の貴重な資料が国民共有の財産として継承され、活用されていくよう、引き続き関係機関の理解と配慮を願うものである。

最後になるが、旧満洲には日本にとって暗い歴史がからんでいる。本書はこの問題には深入りせず、あくまでも気象資料を発掘する研究者としての淡々とした書き方になっている。とは言え、第10章には敗戦後の日本人職員の悲惨な運命が書かれ、その一方、現地職員の一部が新中国の気象事業の発展に貢献したというエピソードが述べられている。また終章には、当初「偽満洲国」の気象資料に無関心だった中国の研究者にもデータ・レスキューの重要性が理解されるようになり、著者との間で共同研究の機運ができつつあることが書かれている。「科学に国境はない」というのはきれいごとかも知れないが、過去の気象データがいわゆる歴史問題を超越して気象学・気候学に役立てられることを望む。

(気象研究所 藤部文昭)